

要旨

チュヴァシ語（チュルク諸語オグル語群）の2・3人称否定命令形では、否定小辞 *an* が命令形に前置される（例：Kay! 「行け！」 > An kay! 「行くな！」）。述部が先行副動詞 *-sA* 「～して」を含む場合は、*an* が命令形に前置される構造（V-sA an V）と、副動詞を含んだ述部全体に前置される構造（an V-sA V）がある（例：Il-se an kay! / An il-se kay! 「持って行くな！」）。本研究では定量的調査と容認度調査を行い、両構造について次の3点を明らかにした。1）an V-sA V は V-sA an V に比べて頻度が低い、2）動詞間の緊密性と否定のスコープに関する差異はほとんどない（緊密性の強弱に関わらずいずれの構造も見られ、いずれの構造でも否定のスコープは述部全体に及ぶ）、3）ただし *an* と命令形の間に生起できる副動詞は1つまでである。これらのことから、V-sA an V が本来的な構造であり、an V-sA V は、副動詞が1つという限られた条件下で *an* が前に移動した変則的な構造であるといえる。このような移動は、周辺言語にもほとんど見られない。

0. はじめに

チュルク諸語では一般的に、動詞は否定接辞によって否定される（例：トルコ語 Git! 「行け！」 > Git-me! 「行くな！」）。チュヴァシ語（チュルク諸語オグル語群）も同様であるが、2・3人称命令形でのみ、否定小辞 *an* が動詞に前置されるという点で特異である（例：Kay! 「行け！」 > An kay! 「行くな！」）。興味深いのは、述部が先行副動詞 *-sA*¹ 「～して」を含む場合、*an* が命令形の前に置かれる構造（V-sA an V）と、副動詞を含んだ述部全体の前に置かれる構造（an V-sA V）があるという点である（例：Il-se an kay! / An il-se kay! 「持って行くな！」）。本研究は、先行副動詞 *-sA* を含む述部において *an* の生起位置が異なるこれら2つの構造を対象としたものである。

本発表の構成は次の通りである。まず、第1節で先行研究の記述をまとめ、問題提起を行う。次に第2節で調査方法と調査結果について述べ、第3節で考察を行う。最後に第4節でまとめと今後の課題を挙げる。

なお、外国語文献の日本語訳、ラテン文字転写²、例文番号、グロス、文字飾り、図表は特にことわりのない限り発表者によるものである。

1. 先行研究

本節では、1.1節でチュヴァシ語の概説である Clark (1998)、1.2節でチュルク諸語の副動詞に関する先行研究である Johanson (1995) の記述をまとめ、1.3節で問題提起を行う。

1.1. Clark (1998)

チュヴァシ語における否定について Clark (1998: 450) は、後置される語 *mar* は構成要素の否定に用

¹ 母音調和によって交替する異形態 *-sa/-se* を持つ。本発表では、本文中で形態素を表記する際、交替する部分を大文字で表した代表形を用いる。

² 例文中の、ロシア語の音韻体系に従って発音される比較的新しいロシア語からの借用語のラテン文字転写は Timberlake (2004: 25) にある linguistic 方式に従う。異なる転写法であることを示すため、それらの借用語は斜字体で示す。

いられ、動詞語幹は **-mA** によって否定され、前置される **an** は 2・3 人称命令形を否定する (例: **An kay** 「行くな!」) と記述している。

チュヴァシ語の先行副動詞 **-sA** 「～して」について Clark (1998: 446) は、この副動詞が 2 つの出来事を非修飾的 (**non-modifying**) に (例えば連鎖的に)、もしくは修飾的 (**modifying**) につなぐと述べ、それぞれの例を挙げている。

- (1) Xěvel an-sa těttem pul-iččen tăxt-ăr śakănta.
 太陽 沈む-CVB 暗い なる-CVB 待つ-IMP.2PL これ.LOC
 「日が沈んで暗くなるまでここで待っていてください」

(Clark 1998: 446)

- (2) Nürle śantalăk-a tipět-se kăntăr yenčen āšă śil vēr-et.
 湿った 天気-DAT/ACC 乾かす-CVB 南 側.ABL 暖かい 風 吹く-PRS.3SG
 「湿った空気を乾かして、南方から暖かい風が吹いている」

(Clark 1998: 446)

1.2. Johanson (1995)

Johanson (1995: 338) は、基盤節 (上位節) の否定のスコープについて、興味深い通時的発展が存在するが、まだ十分に研究されていないと述べている。Johanson (1995: 338) は、古代チュルク語などのテキストにおいて、 (トルコ語の **-(y)Ip** 「～して」に相当するチュルク諸語の先行副動詞) に基づく副動詞節は、基盤節による否定のスコープの外にあるとし、後にスコープが拡大した可能性を提示している。Johanson (1995: 338) によると、副動詞が基盤節と異なる主語を持つ場合、副動詞は基盤節の否定のスコープから概して排除されるようだが、同じ主語を持つ場合はスコープ内に含まれうるとし、以下の例 (3) を挙げている。一方、修飾的 (**modifying**) な副動詞節 (4) では、そのような解釈は不可能であるという。

- (3) Ev-e gel-ip el-ler-in-i yıka-ma-dı.
 家-DAT 来る-CVB 手-PL-3.POSS-ACC 洗う-NEG-PST
 「彼は、家に来て手を洗わなかった」 (トルコ語)

(Johanson 1995: 338)

- (4) Ev-e gel-ince el-ler-in-i yıka-ma-dı.
 家-DAT 来る-CVB 手-PL-3.POSS-ACC 洗う-NEG-PST
 「彼は家に来ると、手を洗わなかった」 (トルコ語)

(Johanson 1995: 338)

しかし、Johanson (1995: 339) によると、(5) のように否定のスコープは 節でも狭いことがあり、その解釈は文脈によるという。Johanson (1995: 339) は、様々なチュルク諸語における否定の広い・狭いスコープの適用規則はこれまで適切に記述されてきていないと述べている。

(5) Ara-yıp bul-am-ıyör.

探す-CVB 見つける-NEG.PSB-PRS

「彼は探して、(しかし) 見つけられない」(トルコ語)

(Johanson 1995: 339)

1.3. 問題提起

0 節で述べたように、先行副動詞 -sA を含む述部では、否定小辞 an が命令形の前に置かれる場合 (V-sA an V) と、副動詞を含んだ述部全体の前に置かれる場合 (an V-sA V) がある (例: Il-se an kay! / An il-se kay! 「持って行くな!」)。Johanson (1995) は、上位節動詞の否定のスコープが副動詞まで及ぶ場合と及ばない場合を挙げ、様々なチュルク諸語における否定の広い・狭いスコープの適用規則ははまだ適切に記述されていないと述べている。チュヴァシ語の上述の現象について詳細に記述した研究も、管見の限りでは見当たらない。an が述部全体の前に置かれる構造 (an V-sA V) は、動詞間の緊密性が比較的強く、否定のスコープが副動詞にまで及ぶ場合に見られるとの仮説を発表者は立てたが、この検証も含め、それぞれの構造の特徴に関する実証的な研究が求められる状況にある。

2. 調査

本節では、2.1 節で調査方法、2.2 節で調査結果について述べる。

2.1. 調査方法

定量的調査と容認度調査を行った。定量的調査では、まずオンラインコーパス Čävaš čělxin ikčělxellě süpši³ [チュヴァシ語二言語コーパス] (以下 CCIS) を用いて、an が命令形に前置される構造 (V-sA an V) と、副動詞を含む述部全体に前置される構造 (an V-sA V) の頻度を調査した。CCIS で出現数の多い動詞上位 30 個を調査対象とし、検索窓に「副動詞+an」もしくは「an+副動詞」を入力して (例えば、il-「取る」であれば、“илсе ан”(il-se an) または “ан илсе”(an il-se) を入力して) 検索し、ヒット数を集計した⁴。

次に、抽出されたそれぞれの構造の例を動詞間の緊密性の観点から分類し、それぞれの構造との関係の分析を試みた。Johanson (1995: 313-315) に倣い、動詞間の緊密性は以下の 3 レベルを設定した (レベル 1 が最も緊密性が弱く、レベル 3 が最も強い)。

- レベル 1 述部 ([主語] 述語 1+述語 2)
例: kil-se kala- 「来て話す (come and say)」
- レベル 2 述部 ([主語] 述語 (述語核 1+述語核 2))
例: il-se kil- 「持って来る (bring)」
- レベル 3 述部 ([主語] 述語 (述語核 (語彙素+後項動詞)))

³ 総語数約 1285 万語 (2022 年 7 月 25 日現在)。タグなしコーパス。多くの例文にはロシア語の対訳が付いている。検索窓は一つのみであり、検索で記号を用いることはできない。2022 年 7 月現在、リアルタイムで更新作業 (新テキストの追加、ロシア語訳付け作業) が行われている。新聞・雑誌の記事、ニュース、散文集、宗教関連のテキストなどを含む。以下、出典の明記されていない例は、CCIS から抽出されたものである。

⁴ 検索の際は完全一致検索を行うためにキーワードを二重引用符で囲んだ。検索ノイズの除去は行っていない。

例：vula-sa tux- 「読みきる (lit. 読んで出る)」

否定のスコープが述部全体に及ばない例があるとすれば、レベル1の例に限られることは自明である。レベル1の例における否定のスコープの範囲については、発表者がロシア語訳や前後の文脈から判断した。加えて、両構造における副動詞 -sA の生起数についても確認した。

容認度調査では、コンサルタント⁵に発表者が作成した例 (CCIS から抽出された例をもとに、発表者が an の位置を移動させた例) を提示し、「容認可能」、「違和感がある (?)」、「容認不可 (*)」のいずれかを選んでもらう形で容認度を調べた。

2.2. 調査結果

以下、調査結果を、1) 両構造の頻度、2) 動詞間の緊密性、3) 否定のスコープ、4) 副動詞の数、に分けて述べる。

1) 両構造の頻度

調査の結果、an V-sA V の頻度は全体的に V-sA an V に比べて低いことが分かった (an V-sA V が 89 例、V-sA an V が 537 例で、前者の頻度は後者の約 1/6 であった)。動詞別の調査結果は以下の表1の通りである (調査対象の動詞 30 個のうち、an V-sA V が 1 例以上見られ、両構造の合計数が 20 以上の動詞 13 個の結果を示す)。

表1：調査結果 (動詞別)

副動詞	an V-sA V	V-sA an V	tux- 「出る」	4	29
kalaś- 「会話する」	16	18	kālar- 「取り出す」	4	21
il- 「取る」	14	50	yar- 「送る」	4	17
man- 「忘れる」	10	60	pīr- 「行く」	3	47
šuxāšla- 「考える」	8	14	kēr- 「入る」	3	23
tīt- 「掴む」	7	32	kala- 「話す」	2	36
kil- 「来る」	6	40	pāx- 「見る」	1	27

2) 動詞間の緊密性

否定小辞 an が述部全体に前置される an V-sA V では、動詞間の緊密性が比較的強いだろうと発表者は予想したが、抽出された例を観察すると、レベル1に分類される例も見られた (6)。一方、V-sA an V の構造をとるレベル3の例も多く見られた (7)。レベル分けが困難な例もあることから、レベルによる構造の頻度差は明らかにできていないが、レベル分けが可能であった例を見る限り、大きな差は見られないように思われる。

(6) An lar-sa śi!
NEG 座る-CVB 食べる.IMP.2SG

(7) Man-sa an kay!
忘れる-CVB NEG AUX:去る.IMP.2SG

⁵ 1999年生まれでロシア連邦チュヴァシ共和国出身のチュヴァシ語母語話者の男性 A. G. 氏。

「座って食べるな！」

「忘れてしまうな！ (lit. 忘れて去るな)」

3) 否定のスコープ

否定のスコープについても同様に、両構造による違いはほぼ見られず、以下の (8) を除いて、分析したすべての例で、スコープは副動詞まで及んでいた。(8) の副動詞は修飾的 (modifying) であり、後ろにコンマ (ポーズ) が置かれていることから分かるように、命令形と同一の述部を形成していない。

- (8) Věsem tură marr-i-ne pěl-se,
それ.PL 神 NEG.COP-NMLZ-DAT/ACC 知る-CVB
an xăr-ăr vĕsenĕn.
NEG 恐れる-IMP.2PL それ.PL.ABL
「彼らが神でないのを知って、彼らを恐れなくてください」

4) 副動詞の数

V-sA an V の場合は、以下の (9, 10) のように、an V の前に副動詞 -sA が複数現れる例 (... V-sA V-sA an V) がいくつか見られた。動詞間の緊密性のパターンは例によってさまざまであるが、分析したすべての例で否定のスコープは述部全体に及んでいた。

- (9) Ačasem škula itlarax yuratĉăr,
kil-e vaska-sa // tux-sa // an ĉup-ĉăr.
家-DAT/ACC 急ぐ-CVB // 出る-CVB // NEG 走る-IMP.3PL
「子供たちが学校をより好きになるように、家に急いで//出て//走らないように」

- (10) Šilpele pĕrle tĕrlĕ usal ĉir tavrašne
il-se / kil-se // vĕler-se / an pĕter.
取る-CVB / 来る-CVB // 殺す-CVB / NEG AUX:終える.IMP.2SG
「風と一緒に様々な悪い病気などを持って/きて//殺して/しまうな」

(9, 10) では、結びつきの強い箇所を / で、弱い箇所を // で示した。(9) ではいずれの動詞の関係もレベル 1 で、等列に並んでいる。(10) では、一つの述語を形成する前半の 2 つの動詞の関係はレベル 2、もう一つの述語を形成する後半の 2 つの動詞の関係はレベル 3 であり、両述語の関係はレベル 1 である。

一方、an V-sA V の場合は、抽出されたすべての例で、an と命令形の間副動詞が 1 つしか現れておらず、an V-sA V の前に別の副動詞を持つ例 (... V-sA an V-sA V) も見られなかった。(9, 10) の an を移動させた場合の容認度も、an と命令形の間副動詞が 2 つ以上ある場合は「容認不可」であった。コンサルタントによると、(9) で an を tux-sa 「出て」の前に置くと「違和感がある」が、vaska-sa 「急いで」の前に置くと「容認不可」だという。(10) では an を vĕler-se pĕter 「殺してしまえ」の前に置くと「容認可能」であるが、il-se kil-se 「持ってきて」の前に置くと「容認不可」であるという。

これらの結果から、an と命令形の間生起できる副動詞は 1 つである可能性が高い。また、最後の副

動詞と命令形が一つの述語を形成している（緊密性がレベル2以上の）(10) では、そうでない (9) に比べて、**an** を最後の副動詞に前置させた構造の容認度が高い。よって、動詞間の緊密性のパターンの違いが容認度に影響していると考えられる。

3. 考察

調査と分析の結果、**an V-sA V** と **V-sA an V** の両構造について、以下の3点が明らかとなった。

- ① **an V-sA V** は **V-sA an V** に比べて頻度が低い
- ② 緊密性と否定のスコープに関する差異はほとんどない（緊密性の強弱に関わらずいずれの構造も見られ、いずれの構造でも否定のスコープは述部全体に及ぶ）
- ③ ただし、**an** と命令形の間に生起できる副動詞は1つまでである

これらのことから、**V-sA an V** が本来的な構造であり、**an V-sA V** は副動詞が1つといった限られた条件下で **an** が前に移動した変則的な構造であるといえる。この移動は、副動詞+命令形が単一の述部であるという話者の認識によって起こるのであろうし、移動した構造はその認識の表れであろう。**V-sA an V** が本来的な構造であるという主張は、**an** に類する前置否定要素を持つ周辺のフィン・ウゴル系言語（マリ語やウドムルト語）で同様の語順が支配的であることから支持される（なお、チュヴァシ語の **an** は周辺のフィン・ウゴル系言語からの借用であるという説⁶がある）。一方、チュヴァシ語で否定要素が副動詞を含んだ述部全体の前方に移動した構造が一定程度存在することは、周辺のフィン・ウゴル系言語から見ても特異である。なぜなら、発表者によるコーパス調査によれば、マリ語やウドムルト語ではそのような構造がほとんど見られないからである（マリ語でわずかに見られたのみである）。その理由の一つとして考えられるのは、チュヴァシ語には動詞間の緊密性が最も強いレベル3（副動詞+補助動詞）の構造が本来的に存在することであろう。共時的には、動詞間の緊密性が強いほど **an V-sA V** が多いという傾向は確かめられていないが、2.2 節で示した容認度調査の結果は、動詞間の緊密性が強いほうが、**an** を副動詞の前に置きやすいことを示唆している。通時的には **an** の移動が、単一の述語であると認識されやすい構造でまず始まったと考えても不思議ではない。マリ語とウドムルト語にも同様の構造（副動詞+補助動詞）が存在するものの（マリ語でより発達している）、これはチュルク諸語からの影響で生じたと考えられており（Bradley and Pischlöger 2021: 13; Saarinen 2022: 459）、フィン・ウゴル系言語に本来的なものではない。今後はマリ語やウドムルト語に関してもより詳細な調査を行い、チュヴァシ語と対照することを課題としたい。

4. まとめと今後の課題

本研究の意義は、**an V-sA V** が副動詞を含む述部全体の前に **an** が移動してできた構造であることを実証的な調査に基づいて示し、このような移動が周辺のフィン・ウゴル系言語にはほとんど見られないチュヴァシ語における独自の発展である可能性を提示した点にある。本研究の問題点としては、動詞間の緊密性のレベル分けが困難な例があったため、動詞間の緊密性と構造の関係を定量的に明らかにする

⁶ 庄垣内 (1989: 872) は、チュヴァシ語の **an** がフィン・ウゴル語（たぶんウドムルト語）からの借用であると考えられているとしている。他方、かつてチュルク諸語に存在した否定動詞の残存であるとみる説もある (Tekin 1989)。

ことができなかつたこと、動詞によって両構造の頻度が異なることの要因や、話者が an を前に移動させる動機、両構造の使用に音韻的条件や世代差などによる傾向があるのかどうかを解明できていないこと、副動詞以外の要素を含む例を扱わなかつたことなどが挙げられる。an は As-a an il! / An as-a il! 「思い出すな」(as-a il- [記憶-DAT/ACC 取る-]「思い出す」)のように、名詞句を含む熟語動詞においても移動しうる。よって今後は、今回扱わなかつたものも対象に調査を進め、通言語的な位置づけも行いながら、an の移動に関してより詳細で網羅的な記述を行うことを目指したい。

略号一覧

2, 3		2, 3 人称	NMLZ	nominalizer	名詞化
ACC	accusative	対格	PL	plural	複数
AUX	auxiliary verb	補助動詞	POSS	possessive	所有
COP	copula	コピュラ	PRS	present	現在
CVB	converb	副動詞	PSB	possibility	可能
DAT	dative	与格	SG	singular	単数
IMP	imperative	命令	-		接辞境界
LOC	locative	位格	=		接語境界
NEG	negative	否定			

参考文献

- Bradley, J. M. and C. Pischlöger (2021) Converb constructions in Mari and Udmurt: Russian loanwords as a metric of productivity. *Finnisch-Ugrische Forschungen* 66. 5-50.
- Clark, L. (1998) Chuvash. In: L. Johanson and É. Á. Csátó (eds.) *The Turkic languages*, 434-452. London, New York: Routledge.
- Johanson, L. (1995) On Turkic converb clauses. In: M. Haspelmath and E. König (eds.) *Converbs in cross-linguistic perspective. Structure and meaning of adverbial verb forms – adverbial participles, gerunds. Empirical approaches to language typology* 13, 313-347. Berlin, New York: Mouton de Gruyter.
- Saarinén, S. (2022) Mari. In M. Bakr-nagy, J. Laakso and E. Skribnik (eds.) *The Oxford Guide to the Uralic Languages*, 432-470. Oxford: Oxford University Press.
- 庄垣内正弘 (1989) 「チュヴァシ語」 亀井孝・河野六郎・千野栄一 (編) 『言語学大辞典』第2巻. 東京: 三省堂. 869-975.
- Tekin, T. (1989) On the origin of Turkic negative suffix (-mA-). *Acta Orientalia Academiae Scientiarum Hungaricae*. Vol. 43, No. 1. Akadémiai Kiadó. 81-86.
- Timberlake, A. (2004) *A reference grammar of Russian*. Cambridge University Press.

調査資料

Čävaš čělxin ikčělcellě šüpsí (<http://corpus.chv.su/>) [最終閲覧日: 2022/7/29]